

悪魔に対する勝利（２）

2008年1月15日（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

マタイの福音書 4章1節から11節

さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

悪魔は、いわゆる死の力を持つ者と言われています。

今日も先週と同じテーマで、イエス様の「悪魔に対する勝利」について、一緒に考えたいと思います。今読んでいただきましたマタイ伝4章1節に、「イエス様は導かれた」と記されています。ご自分の気持ちに導かれたのではなく、御霊に導かれました。つまり荒野へと導かれたのです。荒野は住みにくい所です。けれども御霊に導かれたイエス様は荒野まで行かれました。イエス様は100%御霊によってのみ導かれたのです。決してご自分からことを行なおうとはなさらなかったのです。一瞬たりとも、イエス様はご自分の思うところに従おうとなさらなかったのです。自分の考え、自分の感情、自分の意志によって行動しなかったのはイエス様だけです。

前に読みました箇所を、もう一度引用します。

ヨハネの福音書 14章30節

「わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。」

「この世」を支配する者とは当時のローマ帝国の皇帝のことではありません。「悪魔」です。この、目に見える世界を支配しているのは「悪魔」です。この世の支配権を、イエス様は悪魔に任せられたと、聖書ははっきり示しています。なぜ、悪魔はこの世の支配者でありながら、イエス様に対して無力だったのでしょうか。それはイエス様が、「わたしの思いではなく、あなた（お父様）のみこころだけになるように」と絶えず願われたからです。

マタイの福音書 3章16節、17節

こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

このマタイ伝3章の16節、17節を読むと、これこそ三位一体の現われでないでしょうか。父なる神、また御子なる神であられる主イエス様、そして御霊なる神は、世の救い主を示されたのです。イエス様は洗礼を受けられ、その洗礼を受けることによってご自分のいのちを罪人である人間ひとりひとりの救いのためにささげること明らかになさったのです。イエス様はなぜこの世に来られたかと言いますと、仕えられるためではなく、仕えるためにお出でになりました。人間のために贖いの代価として、ご自分のいのちを与えるために、この世に来られたのです。

この世に来られたイエス様は聖霊に導かれたお方でした。しかし悪魔に誘惑されました。「悪魔に誘惑されるためにイエス様は御霊に導かれた」と記されています。マタイ伝4章を読むと、三種類の誘惑について書かれています。

一番目の誘惑を通して、イエス様お一人だけが、この世において全く罪のないお方であることを知ります。全く罪のないイエス様は、同時にまことの祭司であられ、仲介者であられます。この試みを通してイエス様は、ご自分がこの人類を完全に救う能力を持っておいでになることを明らかにしてくださいました。

第二番目の誘惑を通して、イエス様お一人だけが、決して偽ることのないお方であることを証明してくださいました。まことの預言者として、イエス様は悪魔の偽りをはっきりと拒否されたのです。

そして第三番目の試みを通して、イエス様は、ご自分が悪魔に対する完全な勝利者であられることをお示しになりました。まことの王として、イエス様は全ての誤った礼拝を拒否されました。

最初の試みは、一緒に考えましたように、「もしあなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい」という悪魔のことばでした。「神の子」は「神」です。神の子は神。

それは当然です。イエス様は、肉体をとられた、「永遠なる神」であります。

この悪魔の攻撃に対するイエス様の武器は、言うまでもなく、ご自分の思いや考えよりも、「みことば」でした。イエス様は、旧約聖書のことばを引用なさいました。「人はパンだけで生きるのではない。人は主の口から出る全てのものによって生きる」と。イエス様は人として、天の父なる神に全く服従の立場をとられたのです。イエス様はただ父なる神の栄光だけを現わしたいと、心から願われたのです。ただの一度もご自分のために生きようとはなさいませんでした。父なる神のみこころが成ることのみが、イエス様の唯一の喜びでした。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。わたしの喜びそのものです」と、イエス様はおっしゃることができたのです。イエス様はご自分の自由意志で、喜んで、心からご自分の生涯を、父なる神のみこころと導きにお委ねなされたのです。つまりみことばとは、イエス様にとり全てであったと言っても過言ではないと思います。

ダビデは、みことばの喜びと力とを実際に経験したので、次のように言ったのです。

詩篇 119篇105節

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

162節

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

と。

みことばは、知識を得るために勉強しなくてはならないというよりも、元気になる源です。「私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました」。分かったから、理解したからではありません。自分のものにしたのです。結果は当然ですが、「あなたのみことばは私の楽しみとなり、心の喜びとなりました」。みことばは真理そのものである、とイエス様は祈りの中で証しなされたのです。みことばが与えられているということは、最高の喜びではないでしょうか。

只今話しましたように、最初の誘惑を通して、イエス様だけが罪のないお方であられ、父なる神のみこころを行なうことのみを願っておられたということを知られます。イエス様は父のみこころ、即ち、この人類をその罪の中から救うことのみを願われ、何一つご自分のために生きようとはなさらなかったのです。それゆえイエス様は、まことの祭司であられ、聖なる神と、私たち人類の間の唯一の仲介者であられるのです。イエス様のみが、「人間の罪」の問題を解決なされたのです。罪は、私たちを主なる神から遠く引き離しました。その隔たりとなった罪の壁を、イエス様はご自分の死を通して取り除かれたのです。

第二の誘惑について、聖書は記しています。もう一度マタイ伝に戻りまして、

マタイの福音書 4章5節、6節

すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」

ここで悪魔は、イエス様を試みるために聖書からのみことば（詩篇91：11）を引用しています。しかし、ある部分を除いています。それは何というみことばかと言いますと、「すべての道で」という句です。つまり、それは次のことを意味しているのです。主なる神は、ご自分に従って、主のみこころにかなう道を歩む者を守られるが、自分勝手に自分の道を歩み、主を試みようとする者は守ってくださらないということになります。悪魔はイエス様を間違った道に導こうとしました。つまり、悪魔はイエス様をご自分から「主の力」と「神性」を現わすように仕向けました。しかしそれはただ、主を試そうとする動機から行なわれたものでした。

同じようなことを、荒野においてイスラエルの民は行なったのです。

出エジプト記 17章7節後半

また彼らが、「主は私たちの中におられるのか、おられないのか。」と言って、主を試みたからである。

と記されています。

申命記 6章16節

あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、主を試みてはならない。

と記されています。

イエス様は、ご自分の父なる神に服従なさる時にのみ、み父からその力と不思議なわざとをいただけるということをご存じでした。悪魔は、聖書のみことばをいい加減に引用し、その前後の関係から正しく把握しようとしませんでした。ですから悪魔は次の詩篇91篇13節のみことば、即ち、

詩篇 91篇13節

あなたは、獅子とコブラとを踏みつけ、若獅子と蛇とを踏みにじろう。

を引用しようとしなかったのです。なぜなら悪魔自身が吼えたける獅子であり、コブラや蛇のようなものだったからです。しかしここで、悪魔は、獅子や蛇のように自分を現わさず、あたかも聖書をよく知る学者のように自分を装いました。

イエス様をご自分を全く父なる神のみこころのうちに任せ、主に服従なさることによってのみ、悪魔に対する勝利が成就しました。聖書のみことばを間違っ引用したり、聖書全体を正しく把握しないということは、悪魔のよく使う手口であり、それはこんにちにも

見られます。例えば統一教会やエホバの証人などが示している通りです。

第一の試みを通して、イエス様はご自分が唯一罪を知らないお方であられ、完全な人として主なる神と人類の間の仲介者となられ、この世を救うことがおできになることを証明なさいました。

第二の試みを通して、イエス様は、ご自分が神ご自身であられることをお示しになられたのです。

マタイの福音書 4章7節

イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない。』…』

と記されています。イエス様はその瞬間に悪魔に向かって、「あなたはあなたの神である主を試みてはならない」と答えられました。一箇所読んでみましょう。

ヨハネの手紙・第一 5章20節後半

私たちは、真実な方のうちに、すなわち神の御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

「この方こそ」とは、イエス様こそということです。

イエス様はなぜ神の御子と呼ばれたかと言いますと、奇跡的にお生まれになられ、また人間としてお生まれになられたからです。はっきり、この「イエスこそ、まことの神、永遠のいのちである」と書かれています。イエス様はまことの預言者であられ、真理そのものであられます。「わたしは真理です」とイエス様はおっしゃられたのです。ですから偽り者である悪魔は、逃げ去るより他はありませんでした。

最後に第三の試みについて、一緒に考えたいと思います。マタイ伝4章に戻りまして、マタイの福音書 4章8節、9節

今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

ルカ伝4章6節を読むと、さらに説明されています。

ルカの福音書 4章6節

こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。」

「差し上げられます」。この悪魔の言った言葉は嘘ではなかったのです。

最初の人間であるアダムが罪に落ちてしまったことを通して、悪魔はこの世の支配者となりました。聖書は、悪魔を「この世の支配者」と呼んでいます。

コリント人への手紙・第二 4章4節

そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神の形であるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。

「この世の神」とは、悪魔のことです。悪魔は、この世の神、この目に見える世界の神、そして支配者、と呼ばれています。

イエス様は語られました。

ヨハネの福音書 12章31節

「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。」

また、

ヨハネの福音書 14章30節後半

「この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。」

と記されています。悪魔は、自分がこの世の支配者であることを知っていました。しかし将来この地上において、「まことの王」となられるのは主イエス様です。

詩篇 2篇8節後半

「わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」

と預言されています。

この約束は、イエス様のために書かれたものです。いつの日か必ずイエス様はこの世の王となられ、すべての栄光と誉れはイエス様に帰せられるようになります。

創世記を読むと分かります。エデンの園で悪魔はこの世の支配者であったアダムを誘惑し、その罠に陥れ、「世の支配権」をアダムから奪ってしまいました。そこで悪魔は、このアダムから奪い取った世の支配権をイエス様に提供しているのです。悪魔はそのとき既に、イエス様がやがてこの地上の王となられ、この世のすべてを支配なさるようになることをもちろん知っていました。悪魔の目的は、イエス様をご自分の思いに従って、父なる神の命令なしに実行なさるように仕向けることでした。エデンの園においては、アダムとエバが悪魔の誘惑の中に陥ってしまいました。その時二人は、主の命令なしに、祈ることなしに、尋ね求めることなしに、ことを行なってしまったからです。

しかしイエス様は、悪魔に勝利なさいました。イエス様は決してご自分の思いやご自分の願いに従うことなく、ただ天の父なる神のみこころに、ご自分を委ねられたからです。結局悪魔は、イエス様を十字架への道から何とかして引き戻そうとしていたのです。悪魔は、「どんな方法をとってもかまわない、この世の王となるためには」。そのようにイエス様に思わせようとしていました。涙を流すことなしに、十字架の苦しみなしに、自らを捧げる

ことなしに、王になることをイエス様に勧めました。もちろん、イエス様は「十字架への道」なしにでも、この世の王となることができになったはずですが、しかし、イエス様はまず、やがて神の裁きの前に立たなければならない人間の罪の問題を解決しようとなさいました。そして私たちの罪を解決するためにまず、イエス様自らがその罪の呪いをご自分の身に負われて、人々からは誤解され、あざけられ、はずかしめをお受けにならなければならなかったのです。『血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。(ヘブル9：22)』これこそ、聖書の最も大切なメッセージの一つです。罪のないお方が代わりに死ななければ、罪の赦しも、まことの救いもありません。

だれでも十字架の道に逆らう者は、悪魔の道具となってしまいます。イエス様の弟子であるペテロでさえも、イエス様の十字架への道を阻（はば）んだため、悪魔の手下と呼ばれてしまいました。

マタイの福音書 16章23節

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

結局、自分のことを考えるということは、極めて危ないことではないでしょうか。

悪魔に対するイエス様の武器は、みことばでした。「みことばは霊の剣である」と聖書は語っています。

エペソ人への手紙 6章17節

救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

この武器は、私たちにも提供されています。

最初の試みの中で、悪魔はイエス様に石ころをパンにするようにと誘惑しました。悪魔はイエス様に向かって、「あなたにとって全てのことが可能ではないか。あなたの空腹を満たすことはあなたの当然の権利ではないか」とささやきました。しかしイエス様はお答えになりました。「わたしはただ父なる神のみこころのみを行ないたいのです」と。「わたしの父は、パンなしでわたしを生かすこともおできになる。わたしの意志は全く父に属するものです。わたしはただ父の言われるままに行動したいし、行動する」と。

第二の試みで、悪魔はイエス様に向かって、「あなたに何の危険も降りかからない。父なる神があなたを常に守っているから。神に信頼しなさい」と。イエス様は答えられました。「あなたの言う通りです。わたしは父にのみ信頼します。ですから、わたしは父に忠実に従って、あなたの言葉を否定する」と。

第三の試みの中で、悪魔は、イエス様がこの世の支配者となられるために手助けをしようと誘いかけました。イエス様は、ご自分がやがてはこの世の支配者となられること、そ

して悪魔がこれを最後まで邪魔し続けることも知っていらっしやいました。イエス様のご支配は、悪魔に対する勝利を通してのみ確立することができるのです。けれども、悪魔はイエス様に向かって、「自分はあなたを邪魔しません。あなたに向かって闘うこともしません。ただ、私はあなたを助けたいだけです」とささやきました。悪魔は、イエス様がただ一度でも良いから悪魔の前にひれ伏して拝むことを願っていたのです。そのために、悪魔はこの世の栄光全てをイエス様に提供したのです。しかし、イエス様のご目的はただ、父なる神にのみ全ての礼拝が捧げられることでした。

礼拝すること、これは例えようもないほど重要なことです。主なる神も、悪魔も、礼拝されることを望んでいるのです。私たちは、いったい誰に向かって礼拝するのでしょうか。その結果、喜ぶのは悪魔でしょうか。それともイエス様が本当の意味でお喜びになることができるのでしょうか。悪魔は私たちにも同じようにささやくでしょう。まず最初に自分のことを考えなさいと。けれど御霊は、「神の国とその義とを、まず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えてこれらのものは全て与えられます」と、私たちに呼びかけられるのです。

悪魔はまた、聖書のみことばを利用して、自分の思うところの道を進むようにとそそのかすかもしれません。御霊が私たちを、自分の意志や自分の感情や自分の思いに従うことなく、ただ「主のみこころを行なうこと」のみに喜びを見出せるよう、導いてくださいますように。悪魔は、私たちが間違った礼拝、すなわち、主なる神以外のものを第一にするように、絶えず試みています。

ヨハネの福音書 4章24節

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

と記されています。

神の霊は私たちに、神の偉大さと十字架の贖いの尊さを明らかにしようと望んでおられます。もし私たちがイエス様の素晴らしさと、またその十字架でなされた贖いの尊さを知るなら、私たちはただイエス様の前にひれ伏し、礼拝するより他にありません。

「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ」。このみことばの中に、永遠に変わる事のない事実が明らかにされており、同時に、二つの命令も書かれています。その永遠に変わる事のない事実とは、「神はあなたの主である」ということです。

コリント人への手紙・第一 15章47節

第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

「第二の人（即ちイエス様は）、天から出た者です」というのは、天から降られた主であられるという意味です。「すべてのものはイエス様を通して造られ、またイエス様のために造

られた」と聖書は語っています。すべては、イエス様のものです。けれどイエス様は、創造者であられるだけではなく、「救い主」でもあられます。イエス様は、この十字架の贖いを通して、悪魔の支配下にあった全人類を買い戻されました。私たちがその事実を知ろうと知るまいと、またそれを真実なこととして受け取ろうと受け取るまいと、事実は事実です。イエス様は神ご自身であられ、そのことが、イエス様は私たちの創造主であられ、贖い主であられることを通して明らかにされています。

また、二つの命令とはどのようなことでしょうか。

一つは、断固として主にのみ礼拝を捧げること。

二つ目は、心から主にのみ仕えることです。

最後に、この二つの命令に関係するみことばを読んで終わります。

申命記 26章10節後半

あなたの神、主の前に礼拝しなければならない。

列王記・第二 17章36節

「大きな力と、差し伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から連れ上った主だけを恐れ、主を礼拝し、主にいけにえをささげなければならない。」

歴代誌・第一 16章29節

御名の栄光を主にささげよ。ささげ物を携えて、御前に行け。聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。

詩篇 29篇2節

御名の栄光を、主に帰せよ。聖なる飾り物を着けて主にひれ伏せ。

詩篇 95篇6節

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちが造られた方、主の御前に、ひざまずこう。

詩篇 96篇9節

聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。全地よ。主の御前に、おののけ。

詩篇 99篇5節

われらの神、主をあがめよ。その足台のもとにひれ伏せ。主は聖である。

そして今日の箇所。

マタイの福音書 4章10節後半

「…『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

「あなたの神である主を拝め」と記されています。

また、サマリヤ人である女性に言われた大切なことばです。

ヨハネの福音書 4章24節

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

それから、

黙示録 14章7節後半

「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

何度も「拝め」「ひれ伏せ」「礼拝せよ」とあります。

二つの命令とは、今話しましたように、

まず、断固として主にのみ礼拝をささげること。二番目に、心から主にのみ仕えることです。

申命記 6章13節、14節

あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない。ほかの神々、あなたがたの回りにいる国々の民の神に従ってはならない。

申命記 10章20節

あなたの神、主を恐れ、主に仕え、主にすがり、御名によって誓わなければならない。

サムエル記・第一 7章3節後半

「もし、あなたがたが心を尽くして主に帰り、あなたがたの間から外国の神々やアシュタロテを取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出されます。」

ルカの福音書 16章13節

「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

パウロの証しです。

ガラテヤ人への手紙 1章10節

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歡心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歡心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。

エペソ人への手紙 6章7節

人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。

また、

ヨハネの手紙・第一 2章15節

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。

ヤコブは最も厳しいことばを書きました。

ヤコブの手紙 4章4節

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

ヨシュア記 24章15節後半

「私と私の家とは、主に仕える。」

と。

最後にもう一箇所。

ヨハネの黙示録 5章12節から14節

彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。

私たち一人残らず、やがての日に、この礼拝の群れに加えられるようになれば、本当に感謝だと思います。

了